

今月のトピックス

インフルエンザは 3 週連続して減少していますが、この 3 週間で、0～4 歳は増加しています。年齢層別報告数は、第 43 週からは 5～9 歳が最多層となっています。市内でのインフルエンザ入院サーベイランスの半数は 5～9 歳です。脳症好発年齢への注意が必要です。今シーズンの病原体定点からのウイルス検出状況では、すべて A H 1 pdm であり、季節性インフルエンザは認められていません。冬の感染症については、大きな流行はまだ認められていません。

平成 21 年 10 月 19 日から 11 月 22 日まで(平成 21 年第 43 週から第 47 週まで。ただし、性感染症については平成 21 年 10 月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成 21 年 週 - 月日対照表

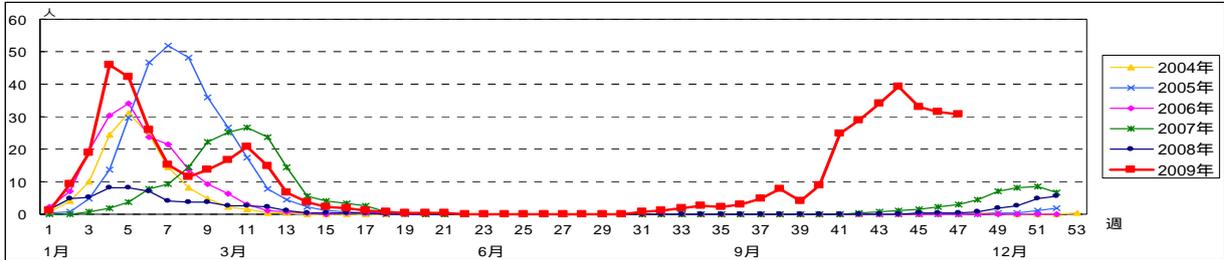
第 43 週	10 月 19～25 日
第 44 週	10 月 26～11 月 1 日
第 45 週	11 月 2～8 日
第 46 週	11 月 9～15 日
第 47 週	11 月 16～22 日

全数把握の対象

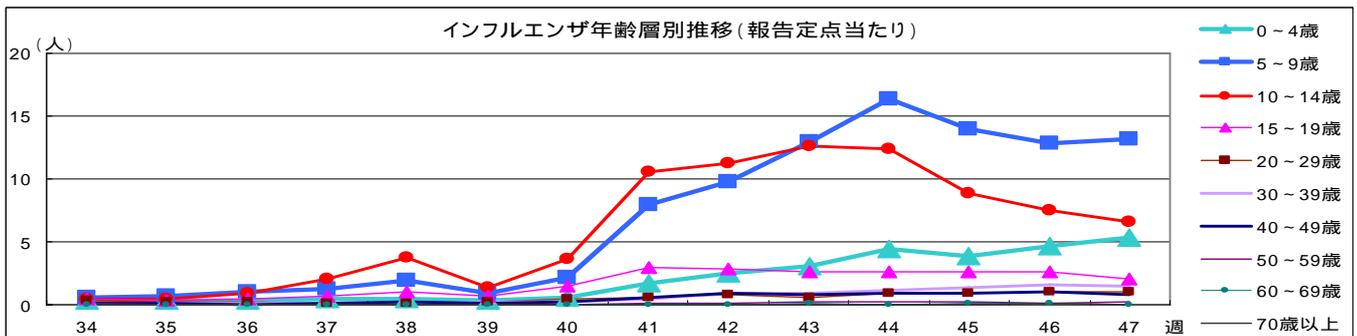
- コレラ:11 月の報告数は、25 日現在で 1 例です。渡航地はインドでした。
- パラチフス:1 例です。渡航地はインドでした。
- 細菌性赤痢:1 例です。渡航地はインド・ネパールでした。
- 腸管出血性大腸菌感染症:3 例です。今年は 1 月からの累計で 80 例の報告があり、昨年同期の 63 例に比べると、やや多い値です。
- レジオネラ症:1 例です。感染経路は不明です。今年の累計は 16 例で、昨年同期の 30 例に比べると少なめです。
- 麻疹:1 例です。予防接種歴は不明です。今年の累計は 42 例で、昨年同期の 1479 例より、著減しています。引き続き予防接種の勧奨が必要と思われます。麻疹は平成 20 年 1 月から感染症法の 5 類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師は届出が義務付けられています。 <http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html>
- つつが虫病:1 例です。全国的に、秋春に患者が報告されています。山等へのレジャーの際には、手足を露出しない、山道を逸れない等、ダニにさされないような対策が必要です。つつが虫病についてはこちらをご参考下さい。 http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_q1/k02_13/k02_13.html
- アメーバ赤痢:3 例です。全例男性です。感染経路につきましては、1 例は性的接触、1 例は国内不明です。1 例はタイと UAE (United Arab Emirates) への渡航歴があります。
- ウイルス性肝炎:急性 B 型肝炎が 1 例です。男性です。感染経路は性的接触によるものです。近年、感染後慢性化しやすい genotype A の割合がわが国でも増えていることが指摘されています。一旦感染し、慢性化すると、治療には相当の労力が必要です。性感染症の最大の対策は、感染予防であるとの周知が大切です。急性 B 型肝炎についてはこちらをご参考下さい。 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/27/319/tpc319-j.html>
- 後天性免疫不全症候群:4 例です。全例男性で無症候期でした。感染経路は 3 例が性的接触、1 例は不明です。
- 梅毒:2 例です。2 例とも男性で、早期顕症 期でした。感染経路は 1 例が性的接触で、1 例は不明です。性感染症は予防できる感染症です。罹患しない知識と、早期発見で早期治療のほかに、パートナーに感染させないことが大切と思われます。性感染症についてはこちらをご参考下さい。 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/29/343/tpc343-j.html>
- 急性脳炎:3 例が報告され、全て 7 歳で、女兒 2 人、男児 1 人でした。また 10 月に診断された脳炎の追加報告が 1 例あり、7 歳男児でした。4 例のうち、3 例が新型インフルエンザによるもので、1 例は原因不明です。国内の 2009 年の第 28 週からのインフルエンザ脳症は殆どが A H 1 pdm によるもので、年齢中央値は、従来の季節性インフルエンザよりやや年長である 8 歳です。第 33 週に B 型による脳症の報告も認められています。 <http://idsc.nih.go.jp/disease/influenza/idwr09week45.html>
 全国の病原体検出状況でのインフルエンザの型別内訳は、こちらをご覧ください。 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/prompt/graph/sinin1.gif>
 今後、インフルエンザ患者動向、型別や、重症化や耐性の遺伝子変異等の病原体情報に注意が必要です。

定点把握の対象

- 1 **インフルエンザ**: 市内流行状況については、第 32 週(8 月 3 日からの週)に流行の目安となる定点あたりの報告数 1 を超え、第 44 週には 39.18 と今シーズン最大となりましたが、第 45 週は 32.93、第 46 週は 31.57 と、第 47 週は 30.92 と、3 週続けて減少しています。過去 6 年間で、「定点あたり 30(警報のめやす)」を超えた年が計 4 年ありましたが、ピークから 3 週間後にはピーク時と比し、51%から 26%まで減少しています。今回は過去の流行曲線とは明らかに異なり、ピークの 3 週間後でも 80%に高止まりです。今後の再流行に注意が必要と思われます。
- また、迅速診断キットでは、A 型 2885 件、B 型 11 件、AB 陽性が 2 件でした。



年齢層別では、殆どがこの 3 週では減少傾向にあるなか、0～4 歳の上昇と、5～9 歳の再上昇が目立ちます。市内の学校等施設閉鎖報告数は、ピーク時の第 44 週では 262 施設で患者 4969 人でしたが、第 45 週では 202 施設 3876 人、第 46 週では 190 施設 3227 人、第 47 週では 177 施設 2596 人と、ピーク時と比較し、施設数では 68%、患者数では 52%と減少しています。但し施設閉鎖をした保育園・幼稚園の患者数は、第 44 週は 394 人でしたが、第 47 週では 428 人と増えています。同時期に中学校は、1453 人が 150 人と著減しています。今後とも引き続き保育園・幼稚園年齢には注意が必要と思われます。



全国では 38.89、川崎市では 27.39、東京都は 24.14、横浜と川崎を除く神奈川県(以下県域)では 38.82 でした。

- 2 **A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎**: 第 47 週は定点あたり 1.24 と、やや増加しています。全国 0.86、川崎市 0.94、東京都 0.72、県域 0.83 と、いずれも横浜市より低い値です。
- 3 **感染性胃腸炎**: 第 47 週は定点あたり 2.71 でした。全国 2.85、川崎市 3.67、東京都 3.27、県域 2.89 でした。
- 4 **水痘**: 第 47 週は定点あたり 0.78 でした。例年冬から春にかけて報告数の増加が見られるので注意が必要です。全国 1.05、川崎市 0.67、東京都 0.74、県域 0.93 でした。
- 5 **RS ウイルス感染症**: 第 47 週は定点あたり 0.03 でした。全国 0.38、川崎市 0.18、東京都 0.24、県域 0.13 といずれも横浜市より高い値です。ヒトモノクロナル抗体が臨床適応された効果の可能性もありますが、インフルエンザと並ぶ冬季の重要な感染症ですので、今後の動向に注意が必要です。RS ウイルス感染症についてはこちらをご参考下さい。
<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/rsv1.html>
- 6 **性感染症**: 性感染症は、診療科でみると産婦人科系の 11 定点、および泌尿器科・皮膚科系の 15 定点からの報告に基づき、1 か月単位で集計されています。10 月は、性器クラミジアは 31 例(男性 17 例、女性 14 例)です。性器ヘルペスは 17 例(男性 8 例、女性 9 例)でした。尖圭コンジローマは、11 例のうち男性 10 例と、殆ど男性でした。淋菌感染症は、17 例で、全て男性でした。「感染しない」「早期発見で早期治療」「早期発見でパートナーには感染させない」等、性感染症に対する注意喚起が必要です。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。

横浜市衛生研究所ホームページ <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/>